

国内研修を終えて

1 はじめに

私は、今回「ポストコロナに向けて地方の観光業ができること」をテーマに、高知県高知市にあるゲストハウス「かつおゲストハウス」で国内研修を行った。本稿では、ゲストハウスでオーナーやスタッフ、宿泊されていたお客様から聞いたお話をもとに私は、海外からの観光客に焦点を当て、地方の観光業が今できることを考えまとめる。

2 テーマを決めた経緯

コロナウイルスの影響を受け、ローカルな土地に行きたいという観光のニーズが高まっている。私は、コロナウイルスの流行前である2017年（高校2年次）に地方の魅力を知った経験がある。1年間アメリカのニューヨーク州に留学していた時のことだ。私は、人口8700人のポートジャービスという町で過ごした。日本人は私たった1人しかいない超田舎だった。しかし、そこでは、みんなが互いを知っているコミュニティが大切にされていたり、昔からのお祭りや伝統を今も大切にしていたりと、田舎の良さがたくさんあり、どっぷりとその国に浸ることができた。交通の便など地方が観光地として成り立たないのには原因があることは確かだ。しかし地方だからこそできる観光業のもてなしもあるのではないかと思うようになった。そして今、私の祖父が生前住んでいた山口県山口市阿東にある一軒家を海外の人も呼び込める古民家ゲストハウス兼カフェにしたいという夢がある。今回は、私のロールモデル 海外でバックパッカーをしていた経験もある元地方紙副編集長、前田真希さんがオーナーをされているゲストハウスで研修をさせていただくことにした。

3 国内研修で知った高知とのゲストハウスの現状

官公庁調べによると、高知県の訪日外国人観光客数は、コロナウイルス流行前でも全国ワースト3位に入る程少ない。一方、仁淀川や四万十川、桂浜など自然の観光資源は多くある。また、世界108の国と地域で観られている映画「竜とそばかすの姫」の舞台となったのは高知県であり、綺麗な描写で世界に日本の風景として発信されている。私は、ポストコロナに向け、訪日外国人観光客をこれからどんどん増やす努力がされているのではないかと思い、話を聞いた。

ゲストハウスのオーナーである前田さんは、大学時代に世界30か国以上をバックパッカーとして旅をされており、その時には主に、安価で泊まることのできるゲストハウスを利用していたそうだ。旅人たちが集まるゲストハウスでは、一般の観光客が知ることのないコアな情報が手に入り、旅が一層面白いものになっていたそうだ。その経験を活かし、まだ日本ではゲストハウスがあまりなかった2012年に高知市にゲストハウスをオープンされた。前田さんは、英語も堪能であるため、事前に調べたネットの記事では、海外からの旅行者と会話している場面も記されてあった。また、ゲストハウスのリビングは、正座の文化がない外国人でも座りやすいように掘りごたつになっている。これらのことから、外国人旅行者の集客には、とても積極的なのだろうと予想していたのだが想像とは少し違い、高知市で海外の方を受け入れるのは、慎重な面も多くあることを知った。その理由として、文化が違う海外の人との共存が難しいという点があげられる。ゲストハウスは、他の宿泊者との交流が醍醐味であるが、日本の生活の中には海外の人にとって時に厳しく感じるルールが沢山ある。代表的な例を挙げると、「室内では靴を脱ぐ」ことだ。そのルールが守られなければ他のお客様

が過ごしづらいと感じてしまう。これまで実際にゲストハウスに滞在されていた外国人観光客の話聞いたところ、玄関から上がる際、靴を脱いでもらうことがクリアしても、母国での暮らしの慣れから、トイレのスリッパを履いたまま部屋で過ごしてしまったり、はだしのまま外に出たしまったりということが多かったそうだ。そのため、Do not go out barefoot (裸足のまま外に出ないで)と書かれた注意書きを置かれていた。しかしなかなか改善されないということで、裸足のまま外に出ることは仕方ないと思うようにして、足ふきマットを用意して、裸足で外に出たら入る前に足を拭くようにと呼びかけることもあったそうだ。私は、この話を聞き、誰にも過ごしづらいと感じさせないための柔軟な考えと逆転の発想にもてなしの真心を感じた。実際に、今までこちらのゲストハウスに泊まれた外国人の方たちは、初めての来日ではなかったそうだ。初めての来日だと、やはり東京や京都を選ぶ人が多いようだ。高知を訪れる外国人旅行者は、日本がかなり好きで生活様式などルールをある程度理解している人が多いから、都会よりは運営しやすく、少しの注意書きや逆転の発想の配慮で成り立っているようだった。また、田舎の小さいコミュニティが大切にされているからこそ起こる共存の難しさにも話を聞く中で気づくことができた。私自身も、普段の生活の中で、人によって感染予防に対する意識の差がそれぞれあることを感じていたがゲストハウスでは、コミュニケーションを大切にしたい人や、パーソナルスペースに加え、ソーシャルディスタンスを気にする人など、様々な考え方が出てくるのであろう。コロナ禍でもゲストハウスの営業を続けられていたが、国籍など関係なく、やはりコミュニケーションを取る場面での不安の声も増えたそうだ。ゲストハウス内でのマスク着用を注意書きで書いたり、抗菌機能のある壁に張り替えたり、人が集まりがちなりびんぐは冬も喚起のために窓を開けたままにするなど、ハード面での最善の努力をされていた。地域のコミュニティが大切にされているからこそ地域外の人に対して警戒的な気持ちを持っている人も一定数いる。このことを理解したうえで、こちらのゲストハウスでは、国内外問わず地域の外から訪れた人たちが頼れる場所を作りたいという考えをおもちだった。そのためにも、飲食店や観光地、宿泊施設など他のお店との繋がりを増やして、田舎だからこそできるアットホームであたたかいてなしをしていきたいとのことだった。実際に私は、こちらでオーナーから、高知の良さや通な情報を沢山教えていただいた。「仁淀川を眺めながら楽しめるカフェがあるよ。」「壮大な自然で非日常感を味わいたいなら、中津溪谷だね。険しい道だけど隠れ七福神を探しながら歩くのがおすすめ。」「土佐和紙の和紙すき体験もあるよ。夏は和紙でうちわづくりもあるよ。」「屋台餃子は有名な店は〇〇で、高知出身の有名女優が気に入っていつも食べるお店は〇〇」「味噌カツがのっているラーメンがあるよ。」オーナーが話す「高知」は行ってみたいと思う魅力が詰まっており、早速魅了され、また来年、高知を訪れオーナーのおすすめを巡る旅をすることを心に決めた。また、ゲストハウス利用客と話していると、皆が高知だけでなく、今まで行った場所の「おすすめ」を写真で見せ合い、紹介し合っていた。高知のおすすめは仁淀川でのSUPらしく、写真だけでも自然の綺麗さが伝わってくる仁淀ブルーだった。そして和洋折衷のモーニングを食べたという利用客の話で盛り上がり、次の日の朝には、早起きをしてゲストハウスのスタッフと利用客の方と一緒にトーストとうどんがセットになっているモーニングを食べに行った。ゲストハウスでの人とのつながり、温かさを実感した。今回作成したガイド誌は、ここで聞いた話をもとに、他のガイド誌には載っていない通な情報を詰め込んだ。

4 まとめ

私は、国内研修を行うまで、地方が観光業としての拡大を図るためにも、外国人旅行者

をどのようにして増やすのかということを考えていたが、増やすことの前に互いを尊重しあうことを意識することが、文化や大切にされていること、これまで築いてきたコミュニティを壊さないということなのだと感じた。そして、ゲストハウスは、コロナの影響で遠くなりがちだった人との心の距離も縮める、温かい力があると感じた。私も前田さんのように温かい環境をつくり、みんなが帰ってきたくなる家のようなゲストハウスが将来作れるように、沢山の人と出会い、様々な考えに触れていきたいと思った。